鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第53号，105－118　2023

Gプロジェクト2021

「Iris~78色の花束~」

中村　民恵，森永　初代，佐々木　亘，上山崎絵梨，末永　勝征

G Project 2021

Tamie Nakamura, Hatsuyo Morinaga,
Wataru Sasaki, Eri Kamiyamazaki and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは，学芸，情報，モード，フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し，グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に，プロデュース力，グループ力，コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする，現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「Iris～78色の花束～」に決め，制作してきた作品の集大成を学内で発表した。さらに，錦江町との連携事業“地域貢献プロデュース”も9年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し，演出を行ったかを，コロナ禍での学生たちの活動を中心に報告する。

Key Words:［問題解決能力］［協働］［大学祭］［地域連携］［学士力］

(Received September 26 2022)

序

Gプロジェクトとは,「プロデュース力･グループ力･コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは，専門教育カリキュラムの系列【Gプロジェクト】に設けられた5つのプロデュースに基づき,グループでのコミュニケーション能力を伸ばし，同時に個々人のプロデュース能力を高め，学生の人間としての力を豊かにすることが大きな目標である。グループでの活動に対する自分の役割をしっかり認識し，目標実現に向けた計画を立案・実行し，それぞれ特定のテーマを達成できるように指導した。昨年に続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により，学校行事を含め様々な活動が制限された。教育課程の体系化や単位制度の実質化，教育方法の改善など学士力への取り組みについてもウィズコロナ時代にどう対応すべきかを検討する一年となった。

コロナと共存する中で，学習成果の発表の場である大学祭についても舞台発表に限定し，人数制限を行い実施することができた。限られた時間と制限のなかにおいて学生たちの活動について報告する。

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

Ⅰ．学芸プロデュース

2021年度の学芸プロデュースは，10人での活動であった。そのため，PDCAサイクルの計画（P）として，役割分担を行うことを打ち立てた。実際に活動して（D），分担することにより役割ごとのリーダーが決まっているため，作業を進めるのが容易だったと感じる。

しかし，人数が多いことで仕事をやる人とやらない人が偏ってしまった。出来る限り全ての人が作品作りに関われるよう役割を分担したが，まだ不十分だった。その原因（C）として，作業の進み具合によって，最初に分けたシナリオ・イラスト（人物）・イラスト（背景）・音声・編集の5つの班とは違う作業を行ったことが挙げられる。始まったばかりの段階ではイラストが完成しておらず，編集の役割の人に作画をしてもらった。また，終盤になると，音量調整やアニメーションの作成など膨大な量の編集を進める必要があり，役割に関わらず全ての人が編集に携わった。その結果，作画ソフトや編集ソフトの扱いが分かる人に仕事が集中することになった。

この結果から改善策（A）として，自分の役割ではないから覚えなくてよいという考えを持たないようにするため，あくまで「中心として」その分担を行うことにし，ソフトの扱いを最初に全員で共有して誰でも扱えるようにするべきだと考える。また，複数人で一つのファイルを編集するため，どこまで進めたのか，修正点は無かったかなどの情報共有を行う時間がとても重要だと感じた。

最も困難だったのは，男性キャラクターの声だった。学生の力で全て制作したいという思いから，先生方に依頼せず，声の低い学生に男性役を任せた。しかし，何度録音し直してもセリフが棒読みという印象が拭えず，大学祭間近に急遽声優の変更を行った。

その結果，棒読みの問題は解決したが，今度は声の高さが問題となった。メンバー総出で音声を低くする調整に取り組み，ピッチの設定を駆使して違和感のない男声にすることができた。過去にはない挑戦となったが，違和感なく声を映像に落とし込むことができ，大成功に終わったと感じている。

2021年度は，制作においてアニメーションにこだわった。口のみを開閉させたイラストを三枚描き，セリフに合わせて口の動きを0.1秒単位で変化させた。何度も声と動きを見比べて，キャラクターから声が自然に出ているように，また，場所の移動を伴う場面切り替えでは，キャラクターの足を動かすアニメーションを入れ，単調な画面にならないよう工夫した。二人のキャラクターが歩く場面では，二人の歩調をバラバラに描き，足音も二重に入れて現実感を演出した（図1）。

図1　二人が歩く場面

そのため，ずっと同じ構図でキャラクターが話し続ける場面が減り，映像に違和感なく物語に入っていけたのではないかと思う。ただ，アニメーションで違和感を消すことが出来ても，その分ストーリーの説明時間を削ってしまうため，理解が難しい人が出てくるという問題点も浮上した。シナリオを考える時点で，全ての人が納得する理由付けや，分かりやすい場面転換などを考慮する必要がある。

また，病室で話す場面では，久しぶりに友人と会えたという明るい雰囲気から，キャラクターが亡くなった後の話に切り替わる際に，その場の静かな空気感が伝わるよう，風の音とともにカーテンを揺らすというアニメーションで緩急を付けた（図2)。病室の中で移動することなく会話をするだけのシーンだったが，カーテンのアニメーションによってキャラクターが画面に映り続けることを回避し，窮屈な印象を与えてしまわないようにすることができた。しかし，この場面ははっきり「回想」と分かるように，画面を縁取りセピア色のフィルターをかけるといった工夫を行うべきだったと考える。

図2　カーテンが揺れる描写

舞台発表全体のまとまりを表すものとして，情報プロデュースとの繋ぎ部分の構成も検討した。学生の後ろ姿の映像から開始する情報プロデュースに合わせ，作品のラストシーンで学生の背中のイラストを用いた（図3)。その際，イラストと映像のサイズを揃え，画面の切り替えがスムーズに行えるよう工夫した。生まれた子どもの成長過程を描いた物語から，情報プロデュースの最初のシーンで友人と笑い合っているという映像に繋ぎ，統一感のある作品に仕上げることができた。

図3　エンディング

昨年度と同様，2021年度も新型コロナウイルスの影響によって，プロデュース活動は大きく制限された。特に夏休み期間の学内立ち入り禁止により，制作が大幅に遅れることとなった。そのような状況の中でも，メンバー全員が納得できる動く絵本を作成できたことを嬉しく思う。学芸プロデュースという名称での活動は今年度が最後になるが，今までの先輩方の活動を糧にして今後の活動を行ってほしい。（酒井桃花）

Ⅱ．情報プロデュース

2021年度の情報プロデュース4名は，　1年間を通してパソコン操作のスキルアップを目指し，WindowsやMacの機能を学び様々な場面で実践的に活用してきた。前期は，各自がパソコンスキルの向上を目標に，リーフレットや純短マップの作成，名前シールの作成，様々な学校行事等の撮影から編集までを行い簡単な動画作成に取り組んだ。

後期は，大学祭に向け「Ｇプロジェクト」の発表部門の映像制作を本格的に行った。2021年度の現代ビジネスコースのテーマ「Iris～78色の花束～」に沿って，各プロデュースでコンセプトを立て，情報プロデュースは「希望～明るい未来を信じて～」をテーマに，作品の制作に取り組んだ。新型コロナウイルスの影響で先が見えない不安な日々が続く中で，前を向いて目の前のことに全力で取り組む学生の姿を動画にし，希望を表現したいと考えた。また，日頃支えてくれる家族や友人，先生方など周りへの感謝の思いを繋げて虹にし，テーマとの関連性をもたせた。

前半は，テーマである希望を表現し，前向きな気持ちになってほしいというメッセージが初めて見た人にも伝わるよう，前期の授業で学んだiMovieのタイトルテキストやテロップ機能な

どを用い，工夫を施した。後半は，現代ビジネスコース全員の感謝の思いを記したメッセージを繋げて虹にした（図4)。虹は雨が止んだ後にかかり，未来への架け橋や希望といった意味が込められている。虹を映像の最後に持ってくることで，新型コロナウイルス終息後の「明るい未来を信じて」を表現できるようにした。

図4　虹

テーマを決めた後，どのような構成にするのか，曲は何にするのかなど，メンバーで話し合いを行った。しかし，実際に，撮影した素材を編集してみると，伝えたいメッセージが伝わらず，再度構成や曲を考え直すことになった。情報プロデュース全員がテーマについて共通理解し，そこから余裕のある具体的な計画を立てることが大切だと感じた。また，撮影，編集と二手に分かれて活動を行ったが，互いに情報共有が足りておらず，すれ違いが起きてしまうことが多々あった。そこで，三つの反省点と改善点をそれぞれ記していく。

一つ目は，「メッセージ性」についてである。映像制作に本格的に取り組むにあたり，全員でテーマ決めを行ったが，前半の活動では共通理解が足りていなかったように感じる。テーマに込めた思いを定期的にメンバー同士で確認し合い，映像を通してどのようなことを伝えたいのか，明確にすることが大切だと感じた。

二つ目は，「撮影」についてである。前期の活動でも，行事やイベントをデジタルカメラとビデオカメラで撮影を行ってきた。しかし，画角が工夫されていないものや映り込んでいるものに気をつけず撮影しているものが多く，映像の素材として使えるものが少なかった。撮影機器の操作方法を学ぶだけでなく，撮影時のポイントや注意点などを踏まえ，大学祭の映像制作に向けた撮影を行っておくことが大切である（図5)。

図5　撮影の様子

三つ目は，「情報共有」についてである。今年度は，4人で撮影，曲編集，映像編集などの活動を分担して取り組んできた。分担して作業する分，メンバー内で自分の活動内容を引き継ぐことができていなかった。来年度からは，身に付けた知識を互いに共有し合い，メンバー全員が同じ理解度で活動に取り組むべきである。

本編に使用した曲は「虹」である。「大丈夫だよ」という歌詞から始まるこの曲は，どんなに苦しくても，希望を持って生きていればよいことがあると思わせてくれる曲であり，今回の情報プロデュースのテーマである「希望～明るい未来を信じて～」に強く繋がる曲であると考えて選んだ。

最後に，Ｇプロジェクトでの活動は，初めて経験することが多く，戸惑うことも多かった。しかし，一緒に活動する仲間や指導してくださる先生方･先輩方のサポートがあったからこそ，完成させることができた。大学祭当日の現代ビジネスコース発表後に実施したアンケート調査では,「動画を見て明るい未来を信じて,前を向ける気持ちになりましたか」という質問に対し,「とてもなれた・なれた」と回答した人が99％と，テーマである「希望」が表現できていたのではないかと感じる。また,「画像や動画は見やすかったですか」という質問に対し,「とてもそう思う・そう思う」と肯定的な回答をした人が98％であった。映像制作の過程では，自分たちだけでなく他のプロデュースの学生や先生方に見てもらい意見をいただき，伝えたいメッ

セージ性を強く意識した。また，大講義室で何度もリハーサルを行い，映像の見やすさを確認し，修正を繰り返した。メンバー全員が積極的に意見を出し合い，良い作品にするために最後まで粘り強く取り組んだことが，今回のアンケート結果に繋がったのではないかと感じる。

図6　皆で協力して頑張る様子

「希望」をテーマに一から構成を考え，映像制作を行う中で，私たち自身も，前を向き目の前の物事にひたむきに頑張ることや，日頃の周りへの感謝の気持ちを伝えることの大切さを改めて実感した。これから私たちは卒業し，社会人としての新たな生活が始まろうとしている。大学祭の活動を通して得たものを活かし，支えてくれる周りの人々への感謝の気持ちを忘れず，今，自分がすべきことに精一杯頑張っていきたい（図6）。（永野美玖）

Ⅲ．モードプロデュース

2021年度のモードプロデュースの活動は13人で，現代ビジネスコースのテーマ「Iris～78色の花束～」より「エール～幸せの光をあなたへ～」に決定し，一人ひとりが希望の光を灯す演出にした。観客に未来へ繋がる幸せの光を届けられるかを何度も話し合った。私たちの想いを表現するためにまずは，演出の冒頭でコロナ禍の悶々とする暗い気持ちを表現し，徐々に闇から抜けだす構成となった。

シーン1　ひかりの彼方へ（図7）

情報プロデュースの虹がかかった映像に続き，暗闇とわずかな光の中でスクリーンを上げてスタートする。初めは，照明を消し影だけで存在感を演出。静と動の動きをはっきりと付けるために，つま先立ちすることで動きの美しさを強調させ，二人が鏡に映っているように息を合わせた。

図7　シーン1

シーン2　希望の光（図8）

バックスクリーンに，エール～幸せの光をあなたへ～という文字を投影し，曲が始まると同時にスタート。Aラインのデザインでサテンにシフォンを二枚重ねた薄いピンク色のドレスで登場。光を灯すシーンは一つひとつの動きを大きく丁寧にゆっくりと表現した。指の先まで意識し，観客に光の持つ優しさを表現した。

図8　シーン2

シーン3　夜空の光（図9）

シーン2に続いて，フロントサイドの照明を暗くし，主にスポットを活用し夜空を表現した。黒色の厳粛さを表わすために動きもスローな構成とした。ドレスや装飾にスワロフスキーをちりばめることで，輝く星をイメージした。

図9　シーン3

シーン4　平和の光（図10）

暗闇のシーン3から暖かい柔らかな光を表現するために照明と曲

調を一気に明るくした。身長差のある二人が舞台で横並びにならないように考え，胸に手を重ね平和と人々の幸せを祈るシーンを何度も繰り返し練習した。パステルグリーンのドレスとパープルのドレスの調和で平和の光をイメージした。

シーン5　陽だまりの光（図11）

シーン4よりも更に太陽の光をイメージするために照明は全体的に明るく，曲調はPOPな雰囲気の曲を使用した。赤のドレスが太陽，ゴールドのドレスが太陽の光として二人が同じように動き，バランスを取りながら陽だまりの暖かさを演出した。

シーン6　未来の光（図12）

これまでのシーンとの違いを表現するために動きにメリハリをつけ，照明はフロントからのライトを活用し，光のもつ強さを演出。また，使用した曲に合わせ，静と動で動きにアクセントをつけ未来への希望を力強く表現した。ドレスのデザインも二人ともトレーンを曳いていたことからダイナミックなシーンにすることができた。

シーン7　幸せの光（図13）

ダイナミックなシーン6の後，エレガントに登場することで，相手へ思いやりの気持ちを伝え，すべてを受け取ることができる心の豊かさと，幸せに満ちた気持ちを表現した。ラストシーンは観客に向けて手を伸ばすことで，幸せの光を灯す気持ちを表し幸せを祈った。

シーン8　エンディング（図14）

今回のモードプロデュースのテーマである，「エール～幸せの光をあなたへ～」を演出するにあたりエンディング曲については候補の曲が二曲あがった。どちらもイメージに合った曲だったが，二つの曲を交互に練習し，全員で検討した結果，一人ひとりが会場にいる観客に明かりを灯したいという気持ちで曲を決めた。

図10　シーン4

図11　シーン5

図12　シーン6

図13　シーン7

図14　シーン8

先輩方からミーティングの重要性を伝えられていたことから，本番に向け計画通りに進むよう定期的に開くように決めていた。しかし，新型コロナウイルス感染症の拡大により夏休み期間は学内立ち入り禁止となった。昼食時も感染症対策のため黙食の日々が続いた。本番を目前にみんなの気持ちが一つにまとまらず，このままでは満足していただく舞台にすることができないと思い，本番一週間前，お互いの想いを言葉で伝えあった。心を一つにするため，先輩方が教えてくださった目を見て話し合うことの必要性に気づくことができた。ミーティングにより目的意識を明確にすることができ，メンバーの団結力につながったと考える。

さらに観客のアンケート調査より照明とドレスの雰囲気が合っていたとの回答が100%，また，自由記述に「勇気をもらえた」・「感動した」というコメントを多くいただくことができた

ことは，今回のテーマを観客の皆様に伝えることができたのではないかと考える。舞台発表を支えてくださったすべての方々へ感謝の気持ちを伝え，後輩達にもこの伝統を引き継いでもらいたい。

コロナ禍において学内発表ができたことに感謝し，この貴重な経験を社会人として活かせるようにステップアップしていきたい。（東真衣）

Ⅳ．フードプロデュース

2021年度のフードプロデュースは12名での活動となった。例年より人数が少なく，アップルパイ，クッキー，Ｇカフェの3つの部門を全員で協力して取り組むことにした。2021年度も新型コロナウイルスの影響により，大学祭でのクッキーやＧカフェの運営，アップルパイをインターンシップ先への贈答は取りやめ，学内活動のみとなった。

チーフ・サブチーフをもとにそれぞれに役割を分担した。活動の際に人手が足りないときはフードプロデュース以外の2年生や1年生に協力を呼びかけ，活動することができた。以下，1年間の活動内容等を報告する。

アップルパイはフードプロデュース選択者を中心に，2月に2年生全員が一丸となって制作を行った（図15）。先輩方から受け継いだ純心伝統のアップルパイを1年生に伝えることを目的とし，自分たちの学習の成果として学内の先生方に試食をしていただいた。現代ビジネスコースの2年生38名全員で行ったため，活動を開始するにあたり作り方の映像（DVD）を授業前や制作前に見ることによって作業の流れを全員で把握してから取り組むようにした。動画を視聴する際には資料を作成し，フードプロデュース選択者以外の人が理解を深めることができるように工夫した。資料がわかりやすいか確認するために，第三者に見てもらい改善を重ねた。今後も資料を作る際は誰が見てもわかる資料作りを心掛けてほしい。昨年とは人数も時期も異なり，試作ができなかったため，事前の準備を念入りに行った。また，制作するにあたり進行具合や出来上がりに差が出ないようにメンバーを構成した。コロナ禍であることを考え，アルコール消毒や除菌を徹底した。そのため，来年度以降は早めに計画を立て，実行できるような体制を整えておくことが必要である。

図15　アップルパイ

先輩方から伝わる伝統のクッキーを7月・8月のオープンキャンパスに参加した高校生に配布した(図16)。本来ならば，グループワークの一環として1年生と2年生が一緒にCTT（キャリア・トライアル・トレーニング）でクッキーの試作を行い，大学祭で販売していた。しかし，2021年度は新型コロナウイルスの影響でCTTが中止となった。来年度は1・2年生が一緒に制作できるような機会があることを願う。

図16　クッキー

大学祭でＧカフェの販売ができなかったことから，現代ビジネスコースを対象にした「プチＧカフェ」を11月に2回に分けて開催した。1・2年生が一緒に活動する機会もなく，フードプ

ロデュース選択者が少なかったことから，1年生11人に協力してもらった（図17）。1回目は2年生を対象とし，そこで出た改善点を踏まえながら2回目は1年生を対象として開催した。

プチＧカフェでは提供したい飲み物６種類の試作を重ねた。試作を踏まえ教育支援サイトを活用し，1・2年生全員に事前に飲み物のアンケートを行った。限られた予算で行えるように，提供数を確認することが目的である。当日はスタッフ全員が帽子とエプロン，マスクを着用して例年の大学祭と同じ服装で，1号館の学生食堂で開催した。プチＧカフェのロゴを制作する際には，Ｇコースの一体感を出すためにコースのテーマにある「リボン」を使用し，メニュー表もカフェらしい雰囲気が出るように工夫した（図18）。また，笑顔で明るい雰囲気を意識し，一人ひとりに感謝の気持ちを持って接客することを心掛けた。アンケート結果を踏まえて2回目の接客態度が良くなるよう改善を行った。その結果，接客態度の満足度は2回目の1年生対象では100％にすることができた。

図17　制作風景

図18　プチＧカフェ

活動を通してそれぞれに協働することの大切さを感じることができた。役割を分担し，一人ひとりが責任を持って行動すること，計画を綿密に立てること，情報共有を怠らないことなどが重要であることを学んだ。新型コロナウイルスによって例年通りの活動はできなかったが，自分たちができる精一杯の活動ができたと考える。先生方や先輩方，他プロデュースの協力のおかげでフードプロデュースの活動ができ，自らの成長の機会となった。今後も周りの人と支え合い，何事にも挑戦することを忘れずに社会で活躍したい。（田淵桃子）

Ⅴ．Ｇプロジェクトの活動について

今年度のＧコースのテーマは「Iris～78色の花束～」。Ｉ（私），複数形のｓ（皆・相手）をri（ribbonの頭文字）リボンで結ぶという意味が込められている。78は現代ビジネスコースの1年生と2年生の人数を足した数字である。発表部門ではアイリスの花言葉である，希望，信じる心，恋のメッセージを各プロデュースで表現した。発表部門では観客が発表内容をどのように評価しているかを知るためにアンケート調査を実施した。調査は全学科コースの1，2年生，保護者，教職員を対象とし，2日間の発表で行った。

アンケート方法は紙を用い，観客からの回収率は1日目38.4％，2日目72.3％であった。回答期間は，2021年11月27日（土）から2021年12月6日（月）である。アンケート内容と結果は下記の通りである。今回の報告は11月27日（土）実施した結果である。

【質問1．学芸プロデュース　ストーリーを理解することができましたか】について，

とてもできた52％，できた42％と回答しているが，6％の人についてはストーリーの内容について理解できなかった部分があったことが分かる。

【質問2．学芸プロデュース　愛のメッセージを感じられる内容でしたか】について，

とても感じられた59％，感じられた39％と，伝えたかった愛のメッセージを多くの人に感じ

てもらうことができた。
【質問3. 学芸プロデュース　色と線ははっきりわかりましたか】について，
　とても分かりやすかった60%，分かりやすかった37%と回答している。制作の過程において大講義室で何度も色の確認を行ったことが良い結果につながった。
【質問4. 情報プロデュース　動画を見て明るい未来を信じて，前を向ける気持ちになりましたか】について
　とてもなれた68%，なれた31%と99%の人が前向きな気持ちになれたことが分かった。
【質問5. 情報プロデュース　画像や動画は，きれいで見やすかった】について，
　とてもそう思う74%，そう思う24%と回答している。一方でそう思わないとの回答もあったことから，さらに完成度を高めるためには分かりやすい映像を目指して調整を続けることが大切だと思った。
【質問6. モードプロデュース　照明とドレスの雰囲気が合っていましたか】について，
　よく感じた81%，感じた19%と良い結果となった。
【質問7. モードプロデュース　ドレス発表の演出から光を感じられることができましたか】について，
　大変できた70%，できた29%と，多くの観客に表現した光を感じてもらうことができた。練習を録画し，映像を確認しながら演出を振り返ることの必要性を実感した。
【質問8. 発表部門全体　学芸・情報・モードの3つの発表のつながりを感じられましたか】
　よく感じた47%，感じた43%と回答しているが，7%の人は全体のつながりを感じることが難しかったことが分かった。
【質問9. ご意見・ご感想をご自由にお書きください】について，
「全ての発表がとても感動的で，素敵でした」「最初から最後まで楽しめて，見入っていました」「どの部門からもそれぞれの想いが伝わって感動しました」という意見をいただいた。
　学科・専攻・コース・学年によって伝わり方に差があることが分かった。昨年の反省点を踏まえて，改善点として①回収ボックスの設置，②アンケート用紙に通し番号を記載，③観客の所属や学年がわかるように記入欄を作成した。その結果，昨年よりも回収率は上がった。
　今回の結果を踏まえての改善策として，2つ挙げられる。1つ目は，答えやすいアンケートにすることだ。質問数や質問内容の改善，回答しやすい選択肢を増やす工夫が必要である。2つ目は，司会者よりアンケートの回答をアナウンスすることだ。発表を観ていただく前にアンケートについてアナウンスすることで，アンケートの回答につなげることができると考える。
　2022年度に向けての改善案として，作品を客観的に観て，テーマとの関連性や各プロデュースの発表のつながりについて意見を出し合う機会を増やす必要があると考える。

　フードプロデュースは，例年アップルパイ・クッキー・Gカフェを主な活動としている。昨年度に引き続き，今年度も新型コロナウイルスの影響で学内のみでの活動となった。
　まず，アップルパイについては先輩方から受け継がれてきた伝統のアップルパイを1年生へ引き継ぐことを目的として制作を行った。また，フードプロデュースの学習成果として完成することができたか確認をするためにアンケート調査を実施した。

調査は，現代ビジネスコースの学生と教職員を対象とし，学生はGoogleフォーム（Web），教職員はアンケート用紙に記入する方法とした。回答期間は，2022年2月8日（火）から2月10日（木）の3日間で，回答率は100％であった。下記のアンケート結果は教職員のみの回答となっている。

【質問1. アップルパイ全体の焼き色】について，こんがり焼けている83％，焼き色が濃い14％，焼き色が薄い3％と回答している。オーブンの火力が強かったこと，こまめにオーブンの中を確認していなかったことから，焼き色がつきすぎてしまった。第1調理室で行う際は，学生がオーブンを触ることはできないが中を自分たちでも確認することが重要だということを学んだ。

【質問2. りんごの甘煮の味】について，甘すぎる17％，甘い61％，甘酸っぱい19％，その他3％という回答であった。りんごは収穫時期や品種によって甘さや水分量が異なる。そのため，砂糖の量を変更して制作した。レシピ通りではなく，状況に応じて工夫することが大切であることを学んだ。

次に，クッキーのアンケートを実施した。調査概要は，現代ビジネスコース2年生，教職員を対象とし，アンケート用紙を配布して回答していただいた。回答期間は2021年7月2日（金）から2021年7月5日（月）の4日間で回収率は100％であった。アンケート内容と結果は下記の通りである。

【質問1. 焼き加減】について，丁度良いという回答が100％だった。一方で【質問2. 表面の色合い】については，白い3％，丁度良い97％の回答であり，自由回答の欄に白っぽく感じたという意見が1件あった。このことからクッキーの表面に焼きむらがあったということが分かった。クッキーの状態を確認しながら焼く時間やトレーの向きを変えるなど丁寧な作業をする必要があったと考える。

さらに，プチＧカフェを行った2021年11月12日（金）と2021年11月26日（金）の2日間でアンケートを実施し，現代ビジネスコースの学生，教職員を対象とした。アンケート用紙を配布して回答していただき，回収率は100％であった。アンケート内容と結果は下記の通りである。

【質問1. 接客態度】について，大変良い89％，良い11％の回答であったが，【質問2. 髪型】については，大変良い94％，良い5％，悪い1％の回答であった。この結果から髪型は厳しくチェックし，身だしなみを整える必要があることが分かった。また，プチＧカフェを実施するにあたり，事前に飲み物のアンケートを行うことで，人気メニューを把握することができ，材料を必要数だけ発注することができた。実際に販売が可能となったときも事前にアンケートを行い，人気度を把握しておく必要があると考える。

今年度は人数が少なく，一人ひとりの行動が今まで以上に重要になった。1年間の活動の中で徐々に自分たちで挑戦していくことができるようになり，チームで助け合いながら，それぞれの役割を明確にすることで全員が協力して行うことができた。今後の活動においても全員が自分の役割に責任を持って情報共有を行いながら活動していってほしいと考える。

（永仮桃子／福元瑛）

昨年に続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により，Gプロジェクト開始から13年目も学生は学内のみでの活動を余儀なくされた。コロナと共存する中で，昨年度のノウハウを活かしながら学生は主体的に自分たちの力を最大限発揮することができたのではないかと考える。

今年は夏休み期間中，感染拡大防止のため学生は学内立ち入り禁止となり，大学祭の開催も1か月遅れの11月27・28日に延期された。夏休みに活動できなかったことは学生たちの制作に大きな影響を与えた。また，情報共有･意見交換の場として，コロナ禍になるまではランチミーティングでお互いの考えや意見を出し合いPDCAサイクルを活用していたが，コミュニケーションの場を失った。そのことが，制作活動に大きく影響しチームワークとは何かを理解することが難しくなっていた。リーダーからの報告にもあるように舞台発表部門は発表寸前までまとまる様子がうかがえなかった。夏休み期間中に各リーダーたちはオンラインミーテングも実施していたが，深いところまではなかなか話しをすることはできなかったようである。そんな中，10月になり応援にかけつけてくれた先輩たちの存在は大きかった。まとまりのない後輩たちに的確なアドバイスでリーダーたちをサポートしてくれた。卒業生のサポートは経験したからこそできるアドバイスであり，指導する教員にとって貴重な存在でもある。一つ上の先輩達とは卒業した後も交流を深めている。この繋がりもGプロジェクトの教育効果といえる。

活動の取り組みについての理解度を測る目的で，アンケート調査を今年度も実施した。昨年度からの引継ぎを元に内容の改善を図ったことが，学生の報告からわかる。①回収ボックスの設置②アンケート用紙に通し番号を記載③観客の所属や学年がわかるように記入欄の作成などの改善を図っている。その結果，所属によって伝わり方に差があることが分かった。また，目標としていた回収率に到達しなかったことが来年度の課題である。先輩方の報告を活用し，実践，そして次への課題としてGプロジェクトの取り組みの中で，PDCAサイクルを上手く活用できているのではないかと推察する。

Gプロジェクトに関連する科目のディプロマポリシーの位置づけは「情報活用能力を身に付け，求められていることを的確に表現することができる」,「集団の中での役割を見出し，協働して自らを高める態度を身に付けている」,「問題に気付き，自ら設定した課題に学んできたことを活用することができる」となっている。関連科目として全員が履修する「課題実践研究Ⅱ」の授業アンケート結果では,「a全体を通して，意欲的に取り組むことができた」が86.5%,「b半分程度の割合で，意欲的に取り組むことができた」が13.5%と回答，この結果から各プロデュースの活動を通して自ら進んで行動し，各自の課題と向き合いながら，協働する態度が身に付いていることが確認できる。

昨年に引き続き，学内のみでの活動となったフードプロデュースは限られた条件の中ではあったが，伝統を後輩たちに繋げていくという目的は達成できたと考える。自ら積極的に考えて行動する力を身に付け，人間力を高めるプロジェクトであるといえる。（中村民恵）

Ⅵ. 地域貢献プロデュース

9年目の地域貢献プロデュースの選択者は10名であった。今年度は，新型コロナウイルス感染症拡大に伴い，鹿児島県でもまん延防止等重点措置が2回発令され，学内外での地域活動への参加は,包括的連携協定を結んでいる錦江町との取り組みのみであった。地域貢献プロデュースは，他の4つのプロデュースを選択した上で，希望する学生が履修している。1年次の春休みからイベントなどのボランティア活動とそのための準備などの時間を記録している。2年次後期の履修登録後は，履修者を中心とした日程調整を行っている。ただ，コラボスィーツの商品開発の企画会議は，外部からの出席者との調整もあり，履修者全員が出席できるようにすることは難しい。例年と比べ発売日が1週間ほど早くなった影響で，CM撮影も2月の単位認定試験後ではなく，1月中に行うことになった。販売店が変更になったこともあり，CM撮影は，鹿児島市内と錦江町で計2回行われた。試験前ということもあり日程調整は難航し，錦江町での撮影は授業のある平日に行われ，参加できる学生は限定された。また，錦江町関連のイベントの一部が中止となり，大学祭の開催が例年に比べ1か月程遅くなった影響で，単位を取得した学生は6名であった。コロナ禍にあって，対面授業ではない本科目において，単位認定に必要な活動時間の確保に一層の工夫を迫られ，今後の課題となった。

授業アンケートでは,「全体を通して意欲的に取り組めた」と全員が回答した。到達目標に対する自己評価では,「他者との関わりの中で自己理解を深め，協働する姿勢を習得する」という目標に全員が十分到達できたと回答し,「相手の意見を正確に聴き，自分の意見を適切に表現することができる」という目標に83.3%の学生が十分到達できたと回答している。学生の取り組みにおいても，コロナ禍で活動が制限される中，商品開発の会議の場が，学生の成長を促す機会になったことが伺える。

なお，活動に関する詳細は，チーフである原田向日葵の報告を参照されたい。(森永初代)

2021年度は，例年どおりの活動として，錦江町で田植えや稲刈りを行う「純心水田プロジェクト」，そのお米を使った「コラボ商品開発」を行った。また，新たな活動として,「錦江茶＆まるぼうろプロジェクト」と「認知症の方に優しいお店」のロゴ作成を行った。

錦江町の恒例行事「やまんなか音楽会」は，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，12月に「やまんなかリモート音楽会」として会場内に大型スクリーンを設置して行われた。感染症対策で学生の参加は5名という少人数で，ペットボトル灯篭の設置・点灯と来場者への検温・手指消毒を行った。錦江町の方々が奮闘される姿を目にして，イベントの成功のために私たちも最大限協力した。

今年度の新たな活動である「錦紅茶＆まるぼうろプロジェクト」では，まず初めに錦江町で栽培されている希少品種のお茶「さえみどり」を学生約10名で手摘みし，7kgを収穫した（図19)。その茶葉をほうじ茶に加工し練り込んだ「まるぼうろ」を,錦江町のお茶（大根占茶，田代茶）とセットにして，11月に「かごしまお茶マルシェ2021」(@アミュ広場)で販売した。商品のパッケージ提案や箱詰め,

図19　茶摘み

販売など物販のプロセスについて学ぶとともに，新しいことに挑戦する楽しさや達成感を得て，その後の自信へつなげることができた。

今年度の「コラボ商品開発」では，初の試みとして2つの商品を企画し，県内のＡコープ，山形屋ストア，城山ストアーで販売した。商品開発会議を6回行い（図20），司会を地域貢献メンバー内で順番に担当することで，皆が同じ目標を持って会議に取り組むことができた。会議後は，次の会議に向けて反省点や改善点を出し合い，クラスメイトへの情報共有も行った。会議に参加する上で，事前準備の重要性や目上の方との接し方，PowerPointやスキャナーを使用した資料作成を実践することができた。また，反省点・改善点としては，自分の意見をしっかり持ち，積極的に発言することが大切だと感じた。会議の場で，気づいた課題を指摘し，新しい提案を行ったことで，より良い商品が作れたのではないかと感じる。多くの方々に商品を手に取ってもらうために，クラスメイトの意見を幅広く集め，現代ビジネスコース全員で商品を作り上げた。

図20　商品開発会議

1月には，コラボ商品のCM撮影を行った。今年度はＡコープ，山形屋ストア，城山ストアーの各店舗と錦江町の神川大滝，神川ビーチに分かれて撮影を行った（図21）。例年とは違う販売店であることをアピールするために，各店舗で働く店員の方や錦江町役場の方々も一緒に恒例の「はさんじゃうぞ」ポーズをしていただき，撮影動画をTikTok風に加工するというコンセプトで行った。クラスメイトにも声をかけ，多くの人の協力のもと，緊張感を持ちながらも無事に撮影を完了することができた。CMを通して錦江町やコラボ商品の魅力を十分に伝えることができたと思う。

図21　神川ビーチ撮影

地域貢献活動に参加し，錦江町の豊かな自然や地域の方々の温かさに触れながら，貴重な経験をすることができた。多くの方々と関わることで，多様な考え方に触れ，新たな思考力や実践力が身につき，自分自身の今後の課題に気づくことができた。地域貢献プロデュースのメンバーだけでなく，クラスメイト全員で協力して錦江町の魅力を発信できたと思う。また，活動を通して感じた反省点や改善点として，状況判断力の低さがある。地域の方々の指示を待ってしまうなど，自主的に行動できないことがあった。目の前のことのみならず，常に全体の流れや周囲の動きまで幅広く捉え，柔軟に対応することが大切だと感じた。多くの方々のご支援やご指導をいただいたことを忘れずに，これからも地域の発展に貢献していきたい。（原田向日葵）

結　び

もともと，Ｇプロジェクトは，「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略―コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成―」という課題名で，2008年度から3年間，文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助＜教育・学習方法等改善支援＞」における「学生の

実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて，進められた。それからもう10年以上の年月が過ぎている。

2021年度は，科目としては各プロデュースの最期の年である。今回も，コロナ禍での活動となり，すべてが異例であった。発表部門の一般公開もなく，学生と保護者のみが対象となった。大学祭も何回か中止が検討されたが，どうにか限定的ながら開催することができた。各行事が軒並み中止になる中，学生はモチベーションの維持に大変な思いを抱いたであろう。

ともあれ，今回“Ｇプロジェクト”を通じて，学生が試行錯誤しながらも，自分の能力を発揮し，具体的な成果につなげる機会を得たことは，大きな収穫である。これから社会人として活躍する学生たちが，「社会に必要とされる人間」となることが，スタッフ全員の願いである。2022年度からは，「ＧプロジェクトⅠ・Ⅱ」で，さらなる成果を目指していく。